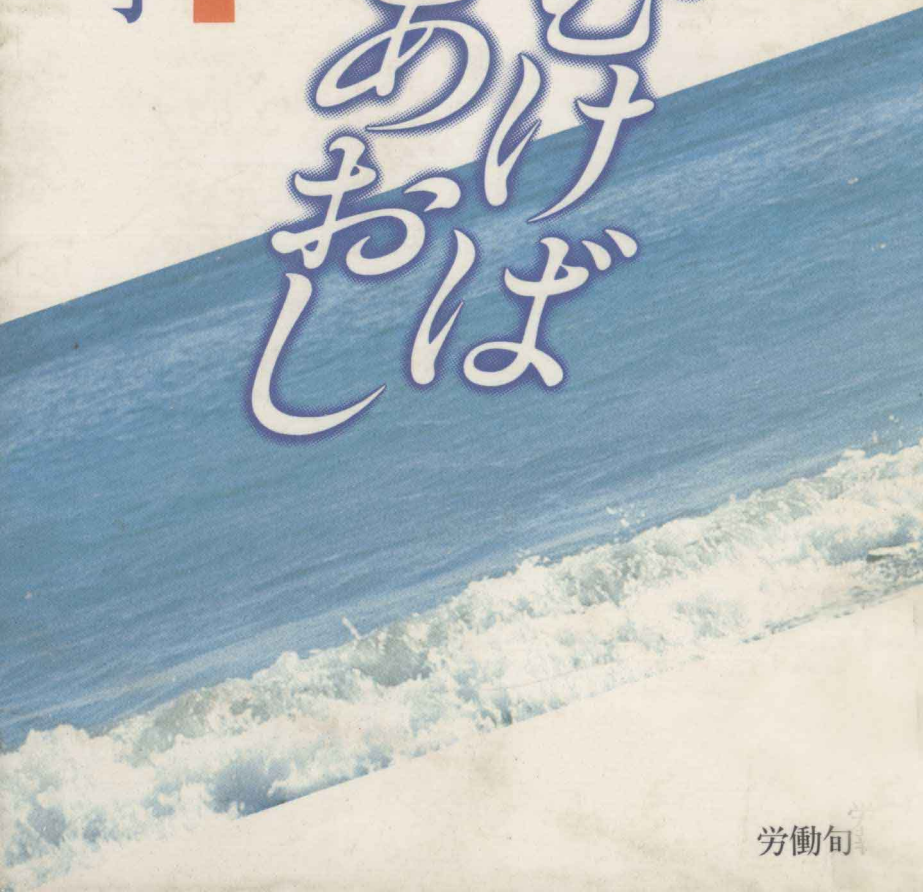
# ふりむけば海あおし

生きて愛して自立して

滝いく子



労働旬

滝　いく子
詩人
1934年，兵庫県尼崎市生まれ。青山学院大学文学部卒業。新聞記者，雑誌編集者を経て文筆生活に入る。1962年詩人会議創立に参加。
文化活動とともに教育，地域運動にも力を注ぐ。1973年ベトナム文化省の招きでベトナム各地を友好訪問す。1984年イタリア・ARCI訪問。
1977年度壺井繁治賞受賞。
詩集『娘よ　おまえの友だちが』『あなたがおおきくなったとき』『金色の蝶』。
著書『団地ママ奮戦記』『娘たちへ』『母さんのあした』『ちひろ愛の絵筆』『愛の詩』『愛はたしかか』。
エッセイ集『母の方舟』『言の葉　文の葉』他。

ふりむけば海あおし

1986年7月31日　初版第1刷

著　者　滝　いく子
発行者　柳沢明朗
発行所　株式会社 労働旬報社
東京都文京区目白台2—14—13
電　話　03—943—9911（代）
振替東京　0—180374
印刷所　㈱東銀座印刷出版

定価はカバーに表示してあります

# ふりむけば海あおし

## 自立して

いく子

労働旬報社

光る樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 光る樹

もやにつつまれて　みんなが手を泳がせている
足もとにはわずかの平穏
だが　わたしはとどまらない
何かがわたしを招き　何かがうちからつきあがる
遠い地平の　あれは大樹
オレンヂ色に光る樹よ

あしうらにくいこむ石の痛み
分け進めば全身　傷のたえまもないが
目をこらせば　そこここに
小さな花　草の実　そして鳥のこえ
頭(こうべ)をあげればはるか地平に
オレンヂ色に樹が光る

どの道を通っていったか　あの人たちは
あの樹のそばで光る人たちは
けれど樹は遠く　わたしは痛む足をまた踏みしめる
花がなければほほえみを
鳥が鳴かねばうたごえを　わが身にそそぎ

かえりみれば荒れ野にひとすじ
わたしの通った道がみえる
青春のあたりに美しいもやがかかったままで
オレンヂ色の人たちのうしろにも　みな
まがりくねったそれぞれの道
そうして私は悟るのだ
はじめは道などどこにもない
遠い地平に光る樹を見た人たちの
ふみしめて通ったところが道になると

## 〈第一部〉 青春の森


### 山のむこうになにがある——旅立ち

いつか書くことに魅せられて（一四）

＊童話・文学のある風景……一四

＊病床を慰めてくれた本と先生の励まし——満州牡丹江市で……一九

＊悲惨な引き揚げ——平和の詩を書く根っこに……二四

「自由でよけりゃあ、もっておゆき」（二三）

＊投稿少女のはじまり……三

＊ボロ家の歌姫……三六

＊やりたいことがあるなら勇気を出して自分でおやり……四一

詩のこころにふれた夜汽車（四四）

### ふりむけば すぐ海あおし——青春

若い詩人たちとの交流（五三）

＊どん底の自活生活とパンセの仲間たち……三
＊どこかちがう――モダニズムの詩と人びととの別れ……六一

ひとり生きること（六八）
＊なりふりかまわず働く――貧乏物語……六六
＊コンクヨコクフクシアッパ　レソツギ　ヨウヨイワウ……七四

やがて青春の森をぬけ（七九）
＊燃焼――夢を語り合う友との出会い……七九
＊恋と結婚と……八七

〈第二部〉　生活を詩う――第二の開眼

わが窓に光さし――気付く

歳月はひとりの少女を母にした（九四）
＊毎日バタバタ――結婚ってたいへん……九四
＊はした金が大事か、生命が大事か――退職のまちがい……九六

壺井繁治との出会い（一〇三）
＊新たな詩運動へのさそい……一〇三
＊生活詩――すばらしい二度めの詩開眼……一〇七
子どもは社会のかけ橋（一一）
＊ひとりぼっちの母親をなくそう――みえてきた周囲……一一
＊この子の生命を守って下さい――団地で娘がダイビング……一一六
すすみ出れば道は拓ける――行動
新しい人間の結びつきの発見（一二〇）
＊民主的詩運動のなかへ……一二〇
＊夢も平和も民主主義も自分でかちとらねば……一二四
リモコンママの子育て（一三〇）
＊一二〇パーセントの全力疾走……一三〇
＊おまえの心の穴はうまるだろうか……一三四
＊大事な宝を贈りあえた……一四〇

## 〈第三部〉 衿をたて吹雪のなかを
### ——亀裂

いらだちの日は積もり（一四五）
＊傷は深く——薬を飲んでも……一五〇
男の仕事、女の仕事（一五六）
＊ゆきちがい……一五六
＊かんじんなときに君はいつも役立たない……一六一
美しい朝などなくて（一六六）
＊ゆっくり変わっていった私の社会観・人間観……一六六
＊苦しい一六年間の終わり……一七三

## 〈第四部〉 自立への選択
### わがゆくみちはいんいんたり——独立

新しい生き方への模索（一八二）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

＊苦しまねばならなかった時代と状況のなかで……一八二
＊私のたたかい——反戦と平和の詩を……一八九

何をして生きるか（一九四）
＊あなたは自分の生きる場をもっている……一九四
＊豊かな人間の門……一九八

この土に共に競う花さかせ——それぞれの道

勇気のある詩人になりたい（二〇八）
＊詩人会議の仲間たち……二〇八
＊心の真実を平明に書きあらわしたい……二一七

この母の娘として（二二二）
＊不遜な思いをぶっつけて……二二二
＊母は絶対に私の側の人……二二〇

活気ある人間でありつづける（二二三）

# 〈第一部〉　青春の森

# 山のむこうになにがある

——旅立ち

# いつか書くことに魅せられて

## ＊童話・文学のある風景

先ごろ、取材で兵庫県芦屋市を訪ねたときのことです。大阪から阪神電車にのっていると、何かしら胸の血がやわらかく騒ぐのです。

聞くところによると私はこの辺りで生まれたらしいのです。甲子園の少年野球が延長一八回までもつづき、観戦した観客たちが興奮さめやらぬままに、家の前の暗い夜道をぞろぞろと帰っていった日のこと。簞笥の上に重ねた新聞紙が少しずれているのを見て、空巣に入られたのを知った母の失敗談。室戸台風の大水害のとき、簞笥の引き出しやタライの中にちょっとした着替えをのせ、女たちが着物はおろか腰巻きまでも裾を高だかとからげて、生まれたばかりの私を抱いて避難したこと。ちょうど股ぐらいまでの水の嵩、泥水にバッサバッサと洗われるのも何のその、声かけあって逃げのびたたくましい母親たちのことを、私は母や伯母たちの笑い話にきいたことがありました。なに気ない思い出話のスキ間から、ポロリとこぼれおちて、少女の私の胸の中に

沈んでいた場所の名が、いま、目の前にある。その不思議ななつかしさに私は酔っていました。

このごろなにか経歴のようなものを書くとき、出生地を書かされることがあります。私は兵庫県生まれ、と書くのですけれど、私が兵庫県尼崎市にいたのは生後一年にも満たない月日でした。生後八ヵ月で父が亡くなったので、そのあとは父母の郷里岡山で暮らしたのです。出生地を書くときいつも迷い、兵庫にも岡山にも申し訳ない思いがします。

父は日本郵船に勤め、欧州航路の商船の機関長でした。一方では文学にも情熱を傾け、短歌や小説を書いていました。『キング』という雑誌の懸賞小説に当選して五〇〇円もの賞金をもらったり、新進作家として嘱望されていて、若くして亡くなったときには追悼特集まで組まれていたのを、父の五〇年祭の御霊祭（わが家は神禱なのです）の折、はじめて知りました。

たいていの人間は、親から子へ、血はもとより生き方までもつながっていくのでしょうか。生い立ちとか生活環境は大きな影響を及ぼすものだと思います。どんな環境のなかにあっても気持さえしっかりしていれば独自の生き方ができるはずだ、とはいうものの、親の生き方、考え方がもたらす子どもの育っていく環境は、長い年月の間に、子どもの心の奥深く浸透して、吸収するにせよ反発するにせよ、強い影響を与えるにちがいありません。私は親から私へ、私から子どもたちへ、伝わっていくものの様子を見ていると、その素晴らしさとおそろしさを痛切に感じてしまうのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com